



「復活！手打ち」に挑戦して

今秋、業界関係者の中でかなり大きな話題となった項目の一つに、「手打ちパチンコ復活」というのがありました。新規メーカーA-gonから10月に正式発表された『CRA-gon 昭和物語』がそれで、盤面中央上部に振り分け役物、下部に3つの2回開きチューリップなどを搭載しており、うまく連動すると200発以上の玉を獲得することが可能となっています。近年、一部のメーカーにて「雀球」を手打ちタイプでテスト導入したニュースもありましたが、役モノやチューリップを使った営業用のパチンコ機としては、約40年ぶりの復活だそうです。

40年前といたら、さすがに私も小学生でしたし、手打ちパチンコはガムなどが景品でもらえる「ゲーム」として遊んだ覚えしかありません。ホールに出入りするようになった30年ほど前には、まだ一角に手打ち機が残っていたような気もするものの、当時は羽根物の新機種に夢中だったため、全く興味がありませんでした（今考えても、もったいなかったです）。思えば、最後にホールで手打ちパチンコを見たのは業界誌記者だった90年代初頭だったでしょうか。5台ほど並んだ手打ちコーナーは、向かいの女性専用台で遊ぶお客さんの「荷物置き場」になってしまっており、その様子を誌面で紹介したこともありました。

一方、手打ちタイプの「雀球」や「アレンジボール」については、設置期間がかなり長かったこともあって、非常によく遊んだ記憶があります。特に前者は200円で3枚メダルを借り、1回1枚を投入。14球を打って牌に対応したポケットに入れてから、1球ずつ打ち直しをして役を作るのが、すごく面白くてハマりましたね。打ち直しは10回まででき、強く打ったり弱く打ったりマイペースで狙えるのも魅力でした。この一連の遊びは、電動ハンドルではなかなか再現するのが難しいと思います。

そんな経緯を辿った、いわば中途半端な手打ち体験者である私ゆえ、冒頭の『CRA-gon 昭和物語』を体験してみたところ…右手を「テング」と呼ばれる棒に引っ掛けつつ、バネを弾くという動作はスムーズに出来たものの、なかなか連続して狙ったところへ打ち続けるのが難しい。また、せっかく連動したチューリップも、すぐに同じところへ入賞してしまったりして、なかなか玉を増やせないのがもどかしい。

打ち出すたびに「ピシューン！」といった、昔のゲームを思い出させるような電子音が聞こえたりする工夫が施されているのは、何とというか「今風」なアレンジとも言えますが、慣れていないせいか100発も打っていると手が疲れて来て、とうとうギブアップしてしまいました。

しかし、それほど無理して打ち続けなくていいところもまた、手打ち台の良さといえます。マイペースで楽しみながらゆっくり狙い、慣れて来たらスピードアップして…というような、上達していく実感が味わえるのも“極意”といえましょう。同社は今後も手打ち台を製造販売していきたいとのことですが、欲を言えば昔よりも盤面領域が広いせいか、釘がすごく多く感じてしまいましたので、今後は役物のサイズを大きくするか数を搭載し、にぎやかにしてもいいのではないのでしょうか？

まだまだ「クルーン」や「クラゲ」など楽しい役物が沢山ありますから、それらと玉が織りなす動きの楽しさを、今後もぜひ再現してってもらいたいと思っています。



私も『CRA-gon 昭和物語』に挑戦しましたが、難しい！▶